

哲学書と科学書

哲学書と科学書

市川治療室 No.162/2005.01

いつもそばに、本が。執拗に再読せがむ哲学書 …… 小椋佳（朝日新聞から

…さて、現在私の書斎の出窓の棚に、『アリストテレス全集』15巻と、『プラトン全集』18巻とかが並んでいる。

30代のいつだったか、神田の古本屋で買い求めたものである。

青春時代、哲学を消化不良のまま脇に置いてしまった 自分への郷愁・未練の象徴か。

日常生活に直接には役に立たないものへのこだわりの残骸か。

その他書棚に点在する哲学書、いずれも、根なし草がその根なしを再確認するだけでしかないことを承知の上で折節買っては読んできたものであるが、執拗に再読をせがむように背表紙を覗かせてきた。

これは性分としか言いようが無い。哲学者になる気も能力も無いくせに、その世界の魅力にひかれる人間がいつの世にも数パーセントはいるようである。

私もその一人だったのだろう。

どなたかが「哲学は鉄学、つまり金を失う学だ」と冗談を言った。

その何にもならないものを遣り残した感を捨て切れず、結局50歳になって私は大学へ戻った。

これも読書の牽引力ということになるだろう。

以下、三石巖著書より抜粋

（市川治療室 No.87/1998. 01から）

およそ2400年前のアリストテレスは、幸福に生きる形は三つあるとした。

第一は「楽しく満足して生きる形」

第二は「責任ある市民として生きる形」

第三は「哲学者、科学者として生きる形」である。

哲学者とは語源的にみれば「思索（筋道をたてて深く考える事）を愛する人」

科学者とは素朴に考えれば「真理を愛する人」をいう。

自然科学が一つの法則を見つけようとするのに対し、哲学はいくつもの見方を許容するが

論理を貫徹する点は同じである。

その意味において両者は学問の双壁となり両輪となっている。

自然科学の性格の中には、合理主義があり客観主義がある。

それは因襲に厳しく、迷信やごまかしを許さない。

科学はごまかしがきかない。

身体の問題、健康の問題はごまかしがきかない。それは科学の問題だからである。

科学書や哲学書を読もう。それが大脳新皮質を鍛える最高の方法だ。

鍛錬されていない脳には、利害の判断はできても真偽の判断はできない。

真偽の判断のできない脳は用意にセモノに引っかかる。

何を経験し、学び、どんな情報をニューロン（脳神経）にインプットしたかということが、人間の行動を決定する。

本当の意味で「考える」というのは、選択ではなく論理過程のことである。

論理とは、きちんと定義された言葉を、緊張関係をたどって繋いでゆくことだ。

これに対して「選択」は一般に「どちらが有利か」という基準に従っておこなわれる。

今年も、健康管理に関して筋道の通った情報、因襲に厳しく迷信やごまかしを許さない科学的な情報をお伝えしたいと考えています。
